CSW68 報告書

ノートルダム清心女子大学大学院 文学研究科社会文化学専攻 1 年(CSW68 参加時)
横山浩花

この度は CSW68 に若手参加者として派遣していただいたことに心から感謝申し上げます。個人の興味関心をベースに多くのイベントに参加することができ、非常に充実した学び多き日々を送ることができました。また、国際規模の議論が進められていく様子を現地で体験できたことは大変貴重な経験となりました。そこで、CSW68 に参加して学んだことや感じたこと、この経験を経て今後取り組んでいきたいことを報告させていただきます。

総会ホールでのオープニングセッションにて

私は CSW68 参加への抱負の一つとして世界のユースと繋がり、高め合うことを掲げていた。そこではじめに、実際に Interactive dialogue with youth representatives on the priority theme (ユースダイアログ) や各国のユースが中心となって行っていたイベントに参加して、感じたことや学んだことを共有したい。

サイドイベントにて

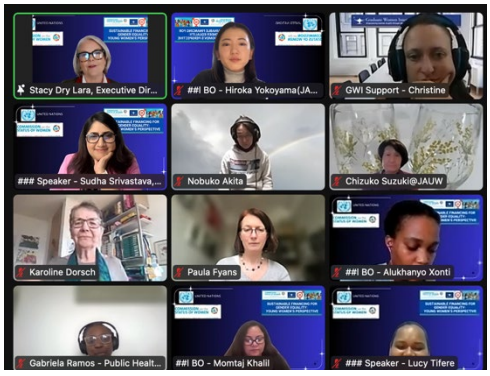
一つ目に、ユースがこれらから自分たちが生きていく社会をより良くしたいという強い意思を持ち自ら発信して今後能動的に行動していかなければならないことを強く感じた。近年、UN Women および CSW ではユースの意見を取り込み、意思決定の場に女性だけでなくユースの参画についても重要性を感じているようだった。国連のユースダイアログが本会議と同じスケジュールに組み込まれるなどその意識の表れは実際に CSW に参加して感じた。しかし、その現場で自国に関するスピーチを行ったら帰ってしまったり、会議で発表されたものを何か議事録等に残し、まとめているわけではないため、各国のユース代表が集まる機会で出されたユースたちの意見は国連加盟国が話し合いを行っている場には提出されない。そのため、CSW の合意結論には CSW に集まったユースたちの意見が直接は反映されないようだ[1]。この経験から、各国のユースが集まることのできる貴重な機会をより意味のあるもの

[1] 3 月 18 日の NGO CSW NY が開催していた Civil Society Briefing: Youth より、UN Women は年間を通じてユースリーダーたちと協力してユース提言を作成し、国連加盟国に提出しているようで、ユースの提言によってリビジョン 2 の文書には変化がみられたと述べていたため、ユースの意見は少なからず合意結論にも反映されているのかもしれない。しかし、その提出された提言書の内容は確認することができず、UN Women のユースリーダーたちが何を提言したのかわからなかった。そのあたりの動きを含め、CSW に参加することのできていない世界のユースにも情報が届き、世界のユースたちが参画した提言書として提出できるようにやり方を考える必要があるように思う。

にするために、ユースたちは大人たちが用意した場所に参加して満足するだけではなく、各国のユース代表のスピーチをもとにユースの意見をまとめ、ユース代表が CSW に意見を持ち込むようなユースの能動的な行動が求められていることをユースダイアログに参加して感じた。

二つ目に、ここまで大きな取り組みは今は難しくても、今からはじめられることとして、ユース同士の団体や国を超えた「横のつながり」と、今までの先輩方が訴えてこられたことや想いを引き継いで、次の世代にも繋げる「縦のつながり」を意識していかなければならないことを学んだ。そこで、実際に現地に参加している日本からのユース同士で協力し、日本政府代表団による NGO ブリーフィングで質問する内容を考え、すでに帰国していたユースたちに情報を共有したり、帰国後も繋がりを持つためにお疲れ様会や報告会の実施を考えており、横のつながりを保つために動いている。他方で、縦のつながりとして、来年以降 CSW に参加するユースに CSW68 に参加したユースたちの想いを伝えるために、ユース同士で行ったミーティングの議事録や日本政府代表団による NGO ブリーフィングで行った質問等を残し、今回の私たちの活動に加えて、今まで CSW に参加した先輩方から引き継いだものを、残してもらえるように動いている。今回、渡米まで週に 1 度、鈴木様をはじめとする JAUW の方々に事前準備としてミーティングを行ってもらっていた。CSW68 に参加したユースとして私も来年以降に参加するユースのサポートをぜひ機会があればおこなっていきたいと考えている。

また、国を越えた繋がりとして、GWI の Young Member Network が行ったパラレルイベントのセッションリーダーとして参加したことや、私の研究分野である包括的性教育(CSE)の推進を目的に活動を行っているユースの団体のサイドイベントやパラレルイベントに参加し、お互いの国の情報共有をインタラクティブに行った。Young Member Network のパラレルイベントでは、アジアからの視点として日本の状況や草の根の取り組みを伝えたいという想いで参加させていただいた。お互いの国の文化や状況は異なるものの、直面している課題に共通点がみられ、各国でどのような取り組みがなされているのか、また「自分たちで」何を行っているのかというお話を聴き、世界で活躍しているユースたちのリーダーシップや取り組みに非常に感銘を受け、エンパワーされた。また、CSE の推進に取り組んでいる団体のイベントでは、どのように CSE に女性だけでなく男性も巻き込んでいくのか、CSE という新たなコンセプトに対して自国の状況や歴史を考慮してどのようにすり合わせて公教育に取り込んでいくのかなど各国の抱えている問題が共通していることを知り、オランダやフランスなどの CSE 先進国の団体からの協力と、同じ問題に立ち向かっている国同士の協力が不可欠であることを感じた。CSW68 後も協力して持続的に活動を行うために引き続きグッドプラクティスなどの情報交換を行い、相互に高め合っていきたいと思う。



Young Member Network のパラレルイベント

そして次に一つ印象深かったパラレルイベントを紹介し、学んだことを紹介する。それは、2024年3月13日にThe French National Assembly Delegation for Women's and Equal Opportunities between Men and Womenとフランス家族計画協会が共催で行なったパラレルイベントである。フランスでは、2024年3月4日に世界初となる女性が人工妊娠中絶を行う自由を憲法で正式に明記することが決まった。このイベントでは、主に、人工妊娠中絶の自由の憲法明記に向けたNGOや関係団体の連携、特にどのようにして国会議員や、研究者、法律家と協力関係を築いたのか、興味関心のない人々を巻き込んで社会運動を起こしたのかなどを実際に今回のムーブメントの中心となっていた方々からお話を聞くことができた。このイベントからフランスの国家と市民社会の関係性を学び、日本とフランスの人々の社会問題への関心や取り組みの違いを肌で感じることができた。市民社会は、国家へ強く訴えたり、国家が確実に成果を出しているのか監視する役割を担っているが、それだけでは不十分であると思った。国家が成果を出したり、実行に移したりするまで待っている時間は勿体無いため、フランスの市民社会側では、国家に訴えかけながらも同時に活動し続けなければならない、自分たちでもどうにか実現に向けて動かなければならないという強い意思を感じた。今回のフランスのパラレルイベントでは、「国家は敵ではない。我々市民社会は、社会的ニーズが保証されるために、国家と市民社会が緊密な協力と協調のもとに活動していかなければならない」と、国家と市民社会の関係について述べていたことが印象的であった。この言葉が表しているように、ある時は国家に対して不満を持つかもしれないが、不満を言っていても仕方がない。訴えかけながらも同時に活動し続け、少しでも早くより良い社会になるように市民社会側として私はアグレッシブに行動して続けていきたいと思った。加えて、私がこのイベントを通して、声を上げ続けることの重要性と NGO などの団体の役割とその重要性を再認識した。今回のフランスでの人工妊娠中絶の自由の憲法への明記に向けては、約1年半前から本格的に取り組みが行われ実現に至っている。しかし、フランスにおける人工妊娠中絶の自由については1971年から声が上げられていたそうだ。やはり、このような実現に至るまでには、市民社会が闘い続け、声を上げ続けていた背景があった。フランス革命を経験し、社会運動の盛んな国では、問題が起きた時だけに運動が起こるのではなく、その裏でその問題が注目を浴びる前から常に声を上げ続け、活動している団体や人々がいることを知り、その熱量や、団体を超えた結束力の強さを今回のイベントに参加して実際に感じた。そして、今回の運動のトリガーとなったり、まとめ役を担っていたのがNGOなどの市民社会であり、国会議員から一般市民（人工妊娠中絶や女性の身体の権利についてあまり興味を持っていないような人を含め）に至るまで多くの人の動員は全てNGOが他の関連組織、大学、研究者、法律家、国際的な団体などコネクション役となることで実現されており、改めてNGO

フランスの団体のパラレルイベント

や市民団体の役割とその重要性を学ぶことができた。

そして、これらの貴重な経験や学びから今後行っていきたいことを二点挙げる。

一点目は、安心して、話せて、学べて、発信できる場所を岡山で作ることである。今回、CSW に参加するまで、私はあくまで研究者の立場でジェンダー平等の実現に向けて行動していきたいと思っていた。岡山は、東京などの大都市と比べて気軽にユース同士がジェンダーについて学んだり、話し合う場が少なく、仲間もいなかったため声を上げることに対してためらいがあった。しかし、もし私のように怖くて発信・行動できない人、ジェンダー平等な社会を目指しているけどどのように行動に起こせば良いのか分からない人がいるなら、一緒に頑張って発信できたらいいなと思い、そのようなことができる場所を岡山でこれから作っていきたいと思った。

二点目は、CSW の経験をより多くの人に伝えることである。今回実際にニューヨークで世界中のジェンダー平等のために真剣に取り組んでいる人、それを支援・応援している人が本当にたくさんいること、国も巻き込んでジェンダー平等について考えている場所があることを知り、肌で感じた。しかし、CSW の認知度はまだまだ低く、世界中にこんなに仲間がいることを知る機会は少ないように感じる。そこで、私のように一歩を踏み出すことが怖い人、もっとジェンダー平等な社会になって誰もが生きやすい社会になることを願っている人に CSW の経験を伝えたいと思う。私の研究領域である性教育の分野では、1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて起こった性教育に対するバックラッシュの影響もあり、何かアクションを起こしたりムーブメントを起こすことは少ない。また性教育を国の教育カリキュラムに導入することの実現といった何か成功体験が少なく、性教育を推進したい人たちの声を上げ続けるための原動力が少ないように思う。そこで、フランスのパラレルイベントの内容など、少しでも他国のグッドプラクティスや成功事例、どのように乗り越えてきたのかといった過程など伝えて、行動を起こし続けている人がこれからも発信し続けていけるための助けとなりたいと思う。私自身が CSW で多くの人からエンパワーされたように、今度は私が CSW の経験を伝えることで誰かをエンパワーしたり、背中を押したり盛り上げていきたいと思う。また、私が CSW の経験を伝えることで、今までジェンダーに起因する問題などを考えたことがなかった人が自分の身近にある些細な出来事からジェンダー平等を考えるきっかけになってほしいと思った。本会議場で行われたオープニングセッションや国の大臣らが参加するサイドイベントでは、国のポリシーレベルの話をしているが、その根拠は自分の個人的な経験からきていたり、自分の周りの人の話だったりと、改めて「個人的なことは政治的なこと」なのだと感じた。そして、その「個人的なこと」は世界で共通していて、共感するシーンでは拍手が起きたり、賞賛の掛け声がなされていた。声を上げると、批判される可能性もあるが、周りに伝えることの大切さを改めて感じ、私の今後の活動によって、日頃のちょっとした経験からジェンダーに起因する問題について気付いたり、興味を持ってくれたりする人が少しでも増えてくれることを願っている。

最後に、このような貴重な機会を提供し、サポートしてくれた全ての方に感謝を伝えたい。

そして、今後の活動に活かし、社会がより良くなるように行動・発信し、社会に貢献して行きたいと思う。